J.S.S.S.W NEWS

日本ソーシャルワーク学会通信

2023年6月5日

【発行責任者】小山　隆

【編集責任者】空閑浩人・小野セレスタ摩耶

No.136

Contents

Ⅰ．巻頭言「ソーシャルワーカーのマネジメント能力の修得」 …… 保正　友子… 1

Ⅱ．「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2022 in 青森」報告 …… 2

Ⅲ．「2022 年度研究セミナー」報告…… 5

Ⅳ．「2022 年度第 4 回理事会」（2023 年 1 月 29 日開催）報告…… 7

Ⅴ．日本ソーシャルワーク学会 2023 年度「第 40 回大会」（7 月 8 日・9 日）のお知らせ…… 9

Ⅵ．新入会員の声 ……10

Ⅶ．自著紹介 ……12

編集後記 …… 空閑　浩人…13

Ⅰ．巻頭言

ソーシャルワーカーのマネジメント能力の修得

日本福祉大学　**保正　友子**

（学会理事／研究推進第 3 委員会・総務委員会）

この 4 月に日本福祉大学社会福祉学部長に就任しました。今まで本格的な業務マネジメントを行った経験がない私にとって、毎日が試行錯誤の連続であり、マネジメント能力の修得が必要なことを改めて感じています。この点は、日頃から一緒に活動している中堅・ベテランの医療ソーシャルワーカーからも「これまで経験のない管理業務を行わなければならなくなったものの、どうすればよいのかわからない」や、「入職した多くの新人をどのように育てればよいのだろうか」という戸惑いの声が多く聞かれます。どの領域でも同じ課題に直面しているため、ここではマネジメント能力の修得について考えてみます。

たしかに、養成校では業務マネジメントはあまり時間を割いて教えていません。仮に教えたとしても、新人ソーシャルワーカーになる前では実感が伴わず、遥か遠くにある事柄として捉えるのではないかと思います。大学院で教えることも一つの方策ですが、皆が大学院に行くわけではなく、全大学院でマネジメントの講義を開講しているわけでもありません。そのため、OJT（On the Job Training）や継続教育を通しての修得が、最も現実的かつ効果的な方法といえるでしょう。その際、何をどのように修得するかの具体化が必要です。

「何を」では、ソーシャルワーカーは「マネジメント一般」を修得すべきか、「ソーシャルワーカーとしてのマネジメント」を修得すべきかが焦点になります。私は両方とも必要だと考えます。前者には、一般的な人事管理・労務管理・業務管理等が含まれますし、災害時の事業継続計画の策定も含まれます。後者には、ソーシャルワーカー業務の効果的・効率的な遂行方法や指導方法、新人をどのように育てるのかという、教育体制やスーパービジョンのあり方が含まれます。

「どのように」では、体系的・継続的なプログラムに基づく研修に加え、職場内での OJT が欠かせません。私の経験を振り返ってみると、職場内の取り組みに加え、様々な職能団体や学会活動が「生きたマネジメントの教科書」になってきました。高校生からの数十年間、様々な会の事務局を担ってきたため、実地でトレーニングをしてきました。それでも、どこかで体系的な研修は受けたかったな、と思っているところです。

このような研修は、職場の経験者や上司、職能団体、専門家や学校、学会が実施主体になり得るでしょう。学会としては研究知見に基づく考え方やノウハウの提供ができるのではないかと考えます。今後、日本ソーシャルワーク学会ならではの方法の模索・構築を目指していきたいと思います。

Ⅱ.「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2022 in 青森」報告

日　　時：2023 年 2 月 19 日（日）13:00 ～ 18:00（対面とオンラインとのハイブリッド開催）
対面会場：青森県立保健大学
テ ー マ：人口減少地域のソーシャルワークの創造性（その 2）
～包摂的な活力ある地域社会づくりとひとづくりの視点から～

日本福祉大学　**川島　ゆり子**
（学会理事／研究推進第 1 委員会・研究推進第 3 委員会）

2022 年度のソーシャルワーク・コラボは青森県社会福祉士会との共催により、2023 年 2 月 19 日（日）「人口減少地域のソーシャルワーク実践（その 2）～包摂的な活力ある地域社会づくりとひとづくりの視点から～」をテーマに、セミナーを開催いたしました。8 回にわたる青森県社会福祉士会との事前打合を経て実施した同セミナーは、当日は対面と Zoom を併用し、北東北 3 県をはじめ全国からソーシャルワークに熱い思いをもつみなさまに参加をいただきました（参加者総数 110 名）。

本セミナーの企画運営に携わらせていただくなかで印象的だったのは、企画運営会議において感じた北東北の実践者の心に静かに燃える熱い思いでした。「人口減少がとまらない」「資源が少ない」「財源が不足する」等、福祉実践を展開していくうえで壁となるような状況が、北東北 3 県での共通の課題です。その中でも「なんとかする」「地域での暮らしを支える」「人が大事、人づくりが大事」という思いが、包摂的な地域社会の創造を支えているのだと実感しました。

当日、シンポジストの青森県鰺ヶ沢町社協井上さんからは、包括的支援体制整備の政策的な流れの中で、制度の狭間を埋めるのは社協ソーシャルワークの責務であり、行政と互いの強みを出し合いながら共同していく必要性が語られました。秋田県藤里町の菊池さんからは、地域の誰もが輝くものを持っており、地域の担い手になれるという「活躍支援」の可能性を示唆していただき、具体的な取り組みとしてプラチナバンクの実践を伺いました。また、宮城県 NPO 法人トナリノ佐々木さんからは、地域の人の声に耳を傾け、地域の相棒となり、人と人を繋ぐ、人と資源を繋ぐ実践について語っていただきました。

過疎地域において人材が不足していることは否めません。しかし、それぞれの枠を越境しながら相互の強みを活かし合える実践が、その地域の必要性に合わせて柔軟に包摂的な地域づくりに寄与しているということを、参加者と共に学ぶ貴重な機会となりました。

ご参加いただきました皆様、会場準備をいただきました青森県立保健大学ご関係の皆様に心より御礼を申し上げます。

なおこのコラボセミナーの趣旨やプログラム、当日の配付資料などは、学会ホームページからご参照頂けます。ご関心のある方は以下からアクセス頂きますようお願いいたします。

https://www.jsssw.org/collaboration/post-1392.html

「ソーシャルワーク・コラボセミナーを終えて」

納谷　むつみ

（ソーシャルワーク・コラボセミナー in 青森実行委員会　実行委員長）

去る2月19日（日）に青森県立保健大学を会場にハイブリットでコラボセミナーを開催致しました。日本ソーシャルワーク学会第39回大会のテーマ「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性」を引き継ぎ、学会開催校企画シンポジウムで共有された「ひとづくり」という課題を深めました。

最初に、理論的立場から川島ゆり子先生にご講演頂きました。資源の少ない地域での「なんとかする」ソーシャルワークの創造性は、専門職が「ノリしろ」を拡大し多職種・多地域と繋がりながら制度の隙間を埋めることで生じる、というお話であったと理解しています。

実践的立場からは北東北三県の事例をご報告頂きました。いずれも「ノリしろ」を拡大して地域の境を越え、専門性の境を越え、支援する・されるの境をも越えた創造的な「なんとかする」ソーシャルワーク実践でした。人口減少地域での専門職や担い手の不足から「ひとづくり」を課題の一つと考え、議論する中で得られた示唆の一つは、福祉的な課題の有無に関わらず全ての人の生き方、「誇り」を支援することで創造されるソーシャルワークの在り方です。そこには、人格形成に向かう終わりのない過程を、人として影響し合いながら共に歩むというケースワークの本質がありました。更に、その過程の中でソーシャルワークの仕組み＝社会事業が生まれ、全ての人を包摂する社会を作り続けることになる、と考えました。

ソーシャルワークは、新たなジレンマの発見と克服の過程でもあります。その過程を歩み続けるため、実践的立場と理論的立場の双方が同じ課題を考え議論する本セミナーの意義を、今回初めて参加し、深く知ることとなりました。また、議論を通じて思いを共有し、困ったときに顔が浮かぶ仲間ができることも大きな意義の一つであると強く実感致しました。実行委員の皆様、ご参加の皆様、皆様とともに今後の道標となる経験ができた幸せに感謝しつつ、ご報告と致します。

「ソーシャルワーク・コラボ in 青森に参加して学び得たもの」

平野　絢子

（ソーシャルワーク・コラボ in 青森実行委員、第2部共同コーディネーター）

第2部は、第1部の基調講演やシンポジウムを受けて感じたことを北東北3県の社会福祉士会青年部会、ユース委員会、ユース部会の会長3名からそれぞれ発表いただき、その後ワールドカフェ方式で参加者それぞれの地域の実情を「人口減少地域におるソーシャルワークの実践を考える」をテーマに情報交換、共有しました。

ワールドカフェ方式をとった理由は、北東北3県の社会福祉士会合同で毎年開催している「小さな勉強会」で馴染みのある手法だったからです。キーワードは「他花受粉」。自分が最初に話したグループでのアイデアがミツバチによる他花受粉のように、他のグループへも拡がり、交わり、新たな発想が生み出されることを目的としました。

今回のコラボセミナーは、対面とリモートのハイブリットで行われ、第2部の会場では4～5人のグループを4ヵ国作り、1回20分のラウンドを3回（①テーマの探求、②他花受粉のため外国へ行き、自国と外国の情報共有をする、③自国へ持ち帰って統合する）行いました。リモートでは本来のワールドカフェのように興味のある国（グループ）への移動がシステム上難しく、事前に決められたグループでの意見交換ではあったものの、参加者皆さんのご協力や共同コーディネーターを担った野村裕美先生のチャットを使った丁

寧な進行のおかげで活発な情報交換が行われました。中でも印象に残ったのは「NPO や民間からみると私たち福祉専門職は近くて遠い存在だった。でもそのままではいけないから、しっかり連携していきたい。」という感想でした。

私個人的には全国規模の学会に実行委員として関わることが初めての経験で、打ち合わせから当日の運営、事後の振り返りに至るまで . どのように議論され、決定していくのかを間近で見られたことが有意義でした。この思いは私だけではありません。第 2 部の企画運営に携わった青森県社会福祉士会ユース部会の部会員皆、貴重な経験ができたと感じております。ユース部会は入会間もない若手会員で構成される有志の集まりで、さらに「年齢関係なく気持ちが若ければ誰でも歓迎」と謳い、会の活動参加のきっかけ作りになるような研修の企画やソーシャルワーカーデー等イベントや研修で会の活動 PR 活動をしています。今回のコラボセミナーでもそのご縁で北東北 3 県の若手の会会長のご参加、所管報告を担っていただきました。

2026 年には青森県で社会福祉士会の全国大会が開催されます。今回のコラボセミナーで経験したノウハウとご縁を絶やさず、存分に活かしたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

「ソーシャルワーク・コラボセミナー　in 青森に参加して

全国社会福祉協議会地域福祉部　**水谷　詩帆**

令和 5 年 2 月 19 日に、日本ソーシャルワーク学会と青森県社会福祉士会の共同主催により開催された「ソーシャルワーク・コラボセミナー in 青森」にオンライン参加させて頂きました。

筆者の所属する全国社会福祉協議会地域福祉部は、市区町村社協、都道府県・指定都市社協と連携しながら、社会福祉協議会の事業・活動、住民主体の地域福祉活動等の推進に取り組んでいますが、近年、とくに町村部の社協からは、深刻な人材不足の課題を聞くことが増えており、本セミナーのテーマ（人口減少地域のソーシャルワークの創造性）に大変関心を持ちました。

資源が限られる一方で、個人や世帯が抱える課題は複雑化・複合化しています。また、社協が行ったコロナ特例貸付を通じて、コロナ前からギリギリの生活をしていたにも関わらず、既存の福祉の相談やサービスにはつながりにくい人たちが想像以上に広範に存在することに改めて気づかされました。

川島先生の講演では、専門分野の総合化と専門技術の総合化というお話があり、専門性の「ノリしろ」を広げ、多職種と連携することの重要性を再認識しました。また、鰺ヶ沢町社協の井上事務局長、藤里町社協の菊池会長、一般社団法人トナリノの佐々木代表理事のご報告では、福祉以外の分野も含めた多様な主体との連携、誰もが社会参加し活躍できる地域づくりなど、たくさんのヒントを得ることができました。

人口減少社会において、いかに福祉の提供体制を持続可能なものにしていくのかは、待ったなしの課題であり、社会福祉法人等の法人間連携や広域的な事業展開、都道府県の役割強化など、仕組みの面でも様々な対応を検討していく必要があります。ぜひ今後も今回のような場を作っていただけたらと願っています。

Ⅲ.「2022 年度研究セミナー」報告

日　時：2023 年 3 月 5 日（日）13:00 ～ 16:00（オンライン開催）

テーマ：子ども家庭福祉ソーシャルワークの新たなニーズ・実践と専門職

江戸川学園おおたかの森専門学校　**杉野　聖子**

（学会理事 / 研究推進第 2 委員会）

2023 年 3 月 5 日（日）13 時から 16 時まで、オンライン（zoom ミーティング）で 2022 年度の学会研究セミナーを開催しました。テーマは、「子ども家庭福祉ソーシャルワークの新たなニーズ・実践と専門職」で、近年の子ども・家庭が直面する今日的ニーズや新たな認定資格をめぐる最新動向をふまえ、児童相談所、市町村、学校・地域、児童福祉施設等におけるソーシャルワーク実践の取組みから、子ども家庭をめぐるソーシャルワークに求められる支援のあり方について議論しました。

まず初めに本学会の和気純子副会長（東京都立大学）より、ご挨拶と新しく創設される子ども家庭福祉の認定資格の検討の状況と併せて本セミナーの趣旨説明がありました。

続いて「子ども家庭福祉ソーシャルワークの新たなニーズとその対応～エビデンスに基づく仕組みづくり」について、山野則子氏（大阪公立大学）より基調講演をいただきました。現代の子どもの置かれている実態の把握から支援体制の課題、「誰一人取り残さない」ための学校スクリーニングについてのご紹介など多くのご発題をいただきました。

その後、3 名の方から実践報告と問題提起をいただくシンポジウムを行いました。

第 1 報告として、打越雅祥氏（世田谷区子ども・若者部要保護児童支援専門員）より「“こども家庭センター”設置と虐待対応の課題」として行政の立場から現状と課題、新しい仕組みへの期待などが報告されました。

第 2 報告では、幸重忠孝氏（特定非営利活動法人こどもソーシャルワークセンター）より「まちの子どもソーシャルワーク実践」として、地域の中で行政や法律の枠に縛られない支援の実践の報告をいただきました。

第 3 報告では、橋本達昌氏（全国児童家庭支援センター協議会）より「時代を画する児童家庭支援センター＋児童養護施設による地域支援」として、地域の中で人と人とのつながりを継続しながら、ゆるやかな息の長い支援の実践が報告されました。

休憩を挟み、50 分ほどの討議では、参加者からの実践報告への関心審は高く、質疑、議論など時間が足りないと感じるような濃密な時間となりました。本学会小山隆会長（同志社大学）にもコメントをいただき、木村容子理事（日本社会事業大学）の総括と挨拶で終了いたしました。

皆様の関心の高いテーマであり、オンラインと参加しやすい形態であったため、事前申込者数は 189 名、当日のアクセス者数は 112 名と盛会なセミナーでした。

今回のセミナーは、子ども家庭分野において、枠組みの中での支援、枠組みを超えての支援、また自分から支援を求めない、もしくは求めることができない人への支援など、基調講演でキーワードとして挙げられた「誰一人取り残さない」支援の実現に向けて考える機会となりました。そしてそれは子ども家庭分野だけでなく、全ての人、社会全体に向けてソーシャルワーク実践をどのように展開していくかということにつながっていくような印象を受けました。

「特定妊婦と心理的虐待、そして司法審査」（発表した内容の整理として）

世田谷区要保護児童支援専門員　**打越　雅祥**

1　こども家庭センター設置へ

2022 年改正児童福祉法では、市区町村に妊産婦や子どもの包括的な相談支援を行うこども家庭センターの設置が求められている。すべての妊産婦と虐待・貧困を抱えた子どもや保護者への支援を一本化した機関となるが、支援する現場では、特定妊婦や心理的虐待など未整理なことが多すぎて、心配だ。

2　特定妊婦とはいつどこが決めるのか

2009 年児福法改正で、要保護児童対策地域協議会設置の努力義務とともに「特定妊婦」という用語がはじめて法律に規定されたが、特定妊婦と判定するための法的手順はあるのか、だれがいつ特定妊婦と決めるのか、要対協で決めるのかなど課題の整理が未だされていない。一方、虐待による子どもの死亡年齢の 7 割近くが 0 歳。妊産婦の死因は自殺が最も多いと言われ、産後うつなどメンタルヘルスの悪化が指摘されている。しかし、こども家庭庁のもとでは、子育て支援給付型サービスの金額を各自治体が競い合う状況になっている。

3　心理的虐待への対応の困難さ

全国の児童相談所が対応した虐待件数約 20 万件のうち、6 割以上が心理的虐待で、さらにその 6 割以上が「面前 DV」。子どもの前で配偶者に暴力を振るうなどして警察経由で通告されるケースがほとんどである。そうした心理的虐待は、子どもに与える影響、客観的評価が困難であり、多くは親への「注意喚起」で終了せざるを得ない状況である。しかし、中学を卒業して、子どもシェルターや自立援助ホームにたどり着く子どもたちの多くは心理的虐待を主訴とし、そのほとんどが、かつて児童相談所などが「関与したことがある」といわれているのである。

4　司法審査の導入で混乱する

法改正に伴い、児童相談所の一時保護開始時に司法審査が導入されることになった。裁判所に一時保護状を請求しなければならない。裁判所は虐待の「証拠・証明」を求めるだろう。児相は今後、一時保護を躊躇することにならないか。証拠が明らかな身体的虐待ケースはむしろまれで、証明できない心理的虐待や特定妊婦など、虐待と言えるかどうか微妙なものはどうなるのか。そもそも「虐待の疑い」によって、いったん親子分離したうえで関係調整をしていくケースも多いのだ。

「子ども家庭福祉ソーシャルワーカー（仮称）」導入も検討されている。専門性を身につけた人材が、まず現場の混乱を整理してくれることを期待したい。

Ⅳ.「2022 年度第 4 回理事会」報告

○日時：2023 年 1 月 29 日（日）18 時～ 20 時　WEB（ZOOM）会議

○出席・欠席者一覧

役職	氏　名	所　　属	出欠
会　長	小山　　隆	同志社大学	出
副会長	久保　美紀	明治学院大学	出
	和気　純子	東京都立大学	出
	大島　　巌	東北福祉大学	出
	空閑　浩人	同志社大学	出
理　事	池田　雅子	北星学園大学	出
	大谷　京子	日本福祉大学	出
	木村　容子	日本社会事業大学	出
	横山登志子	札幌学院大学	出
	志水　　幸	北海道医療大学	委任状
	川島　ゆり子	日本福祉大学	出
	荒井　浩道	駒澤大学	出
	岡田　まり	立命館大学	出
	佐藤　俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	出
	白川　　充	仙台白百合女子大学	委任状
	杉野　聖子	江戸川学園おおたかの森専門学校	出
	保正　友子	日本福祉大学	出
	ヴィラーグヴィクトル	日本社会事業大学	出
監　事	黒木　保博	長野大学	欠
	福山　和女	ルーテル学院大学名誉教授	出
庶　務	小野セレスタ摩耶	同志社大学	出

1. 各委員会からの事業進捗状況報告・協議事項等

○研究推進第 1 委員会

(1) 学会誌編集委員会より『第 45 号』発刊の報告、および『第 46 号』について査読・編集作業中であることの報告があった。

(2) 学会賞選考委員会より象文献のリストを作成中であること、および会員からの推薦分（締切：2023 年 1 月末日）を含めて選考作業に入る旨の報告があった。

(3) 研究奨励委員会より、会員研究奨励費の募集をMM、ＨＰなどで行う（締切は例年通り 2023 年 5 月末日）旨の報告があった。

○研究推進第 2 委員会

(1) 2023 年度第 40 回大会（宮城大会：2023 年 7 月 8・9 日）について、プログラム検討状況その他準備状況について報告があった。

(2) 研究セミナー（3 月 5 日（日）オンライン開催：テーマ「子ども家庭福祉ソーシャルワークの新たなニーズ・実践と専門職」）開催予定の報告があった。

(3) 共同研究について、「多様性と文化的コンピテンスにもとづくソーシャルワークのあり方に関する研究」をテーマにした研究計画および研究体制についての報告があった

○研究推進第 3 委員会

(1) 出版・教材開発班より、「実践研究支援ワークショップ」について 2022 年度の実施報告と 2023 年度の開催計画についての報告があった。

(2) 社会貢献推進班より、2022 年度のソーシャルワーク・コラボセミナー（青森県社会福祉士会との共同企画）について報告があった。テーマは「人口減少地域のソーシャルワークの創造性（その 2）～包摂的な活力ある地域社会づくりとひとづくりの視点から～」であり、開催日時は 2023 年 2 月 19 日（日）

13:00-18:00。対面（会場は青森県立保健大学）とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式。

○国際委員会

国際シンポジウム（テーマ「ソーシャルワークと戦争―避難民支援をめぐる実践・教育のグローカル連携―」2022 年 11 月 12 日（土）17:00 ～ 19:00、日本ソーシャルワーク教育学校連盟と本学会との共催、オンライン開催）の報告があった。

○研究倫理委員会

「日本ソーシャルワーク学会研究倫理規程（案）」「日本ソーシャルワーク学会研究倫理指針（案）」「日本ソーシャルワーク学会研究倫理委員会規程（案）」について説明があった。理事会からの意見を踏まえて引き続き検討する。

○総務委員会

(1) 日本学術会議のあり方に関する日本社会福祉学会会長声明（1 月 6 日付）への本学会からの賛同について報告があった。

(2) メールマガジン（109 号（2022 年 11 月）～ 111 号（2023 年 1 月））＆ニュースレターの発行予定（134 ＆ 135 号合併号を 3 月に発行）について報告があった。

(3) 日本ソーシャルワーカー連盟（JFSW）よりシンポジウム（テーマ「ウクライナ避難民・難民に対するソーシャルワーク」2023 年 3 月 12 日（日）16：00 ～ 18：30 オンライン開催）の後援依頼（1 月 16 日付）について報告があった。各団体からの後援依頼については、会長副会長に諮った上で判断している旨説明があった。

2. 会員の動向（前回理事会 2022 年 11 月 6 日以降～ 2023 年 1 月 26 日現在）

以下の方の入会について承認された

入会（1 名）

	会員種別	氏　名	所　属
1	正会員	清水　冬樹	東北福祉大学

3. 次回（2023 年度第 1 回）理事会および正副会長会議日程について

2023 年 5 月中・下旬で開催することとなった。

4. その他

雑誌『ソーシャルワーク研究』について、リニューアル第 1 巻が 2023 年 1 月末に発行される旨の報告があった。「ソーシャルワーク学会コーナー」については、第 1 号は横山理事が執筆、第 2 号は空閑理事、第 3 号は白川理事が執筆予定。特集論文の企画（2024 年 1 月発刊の号に掲載）については、理事からの意見や提案を踏まえて会長・副会長で検討することとなった。

Ⅴ．日本ソーシャルワーク学会 2023 年度「第 40 回大会」のお知らせ

大会テーマ：「実践現場からの情報発信と実践研究 ～震災復興支援の経験を踏まえて～」

＜開催趣意＞

第 40 回を迎える日本ソーシャルワーク学会宮城大会では、近年、本学会が力を入れて来たソーシャルワーク職能団体との連携を深める取組みの一環として、「実践現場からの情報発信と実践研究」を取り上げます。そして、実践家の皆さんとご一緒に実践研究のあり方と、「実践現場からの情報発信」の意義を共に議論する場にできればと思います。

「実践研究」を含む「研究」は、社会や実践現場に大きな影響を与えうる価値ある「情報」を生産します。またその「情報」は科学的な知の公共財として体系的に蓄積されて、信頼できる「情報」を社会や実践現場にフィードバックします。

一方、優れた「実践現場」の取組みは、多くの実践家に共有することによって、より効果的な支援を生み出し、再現可能な有効な支援方法として定式化できます。より良い支援を生み出すためにも、優れた「実践現場」の取組みは「情報発信」し、積極的に共有することが求められています。またそれによって、「実践現場」の実践力も向上します。そこに「実践研究」の大きな役割があります。　さて、震災など深刻な自然災害が頻発する日本では、震災復興への取組みは社会的に大きな課題です。そこに果たすソーシャルワークの研究的、実践的、そして社会的な役割はとても大きいと考えます。この第 40 回宮城大会では、東日本大震災における経験を手がかりにして、「実践現場からの情報発信と実践研究」の相乗作用とそれぞれの役割について、皆さんとご一緒に議論したいと考えています。

＜開催日時および開催方法＞

・2023 年 7 月 8 日（土）、7 月 9 日（日）
・対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式（※ただし自由研究報告は対面会場のみに限定となります）

＜対面会場＞

・東北福祉大学仙台東口キャンパス（〒 983-8511 仙台市宮城野区榴岡 2-5-26（仙台駅東口より徒歩 3 分））

＜オンライン会場＞

・Zoom 使用（Zoom 情報は 2 日前までに送信）

＜実行体制＞

・主催大会校・主催団体：学校法人梅檀学園東北福祉大学
・共催団体：
【宮城県】（一社）宮城県社会福祉士会、（一社）宮城県精神保健福祉士協会、 宮城県医療ソーシャルワーカー協会、宮城県社会福祉法人経営者協議会
【全国団体】（公社）日本社会福祉士会、（公社）日本精神保健福祉士協会、（公社）日本医療ソーシャルワーカー協会、（特非）日本ソーシャルワーカー協会
・大 会 長：東北福祉大学学長 千葉 公慈
・副大会長：折腹実已子（（一社）宮城県社会福祉士会会長）
小野正生（（一社）宮城県精神保健福祉士協会会長）
畠山　稔（宮城県医療ソーシャルワーカー協会会長）
庄子清典（宮城県社会福祉法人経営者協議会会長）

大島　巌（東北福祉大学副学長）

・実行委員長：田中尚（東北福祉大学教授）

・事務局長：石附敬（東北福祉大学准教授）

＜参加費＞

・会員（含共催団体の会員）7,000 円、非会員 8,000 円、学生・大学院生 3,000 円

（＊オンライン参加者も上記と同額です。ハイブリッド開催のため、事前に全ての参加者へ URL をお送りする関係上、当日の申し込みの受付は行いませんので、ご注意ください。）

＜プログラム＞

・1 日目（2023 年 7 月 8 日（土））

10:00　開会・大会長挨拶、学会長挨拶

10:30-11:45　基調講演　大島巌・竹ノ内章代（東北福祉大学）　＆共催団体の紹介・レスポンス

11:45-12:45　昼休憩

12:45-15:15　大会校企画シンポジウム

テーマ「実践現場からの情報発信と実践研究

～震災復興支援の経験を踏まえた実践と研究の循環可能性～」

シンポジスト：大橋雄介氏（NPO 法人アスイク）

田中伸弥氏（（社福）ライフの学校）

真壁さおり氏（（一社）宮城県社会福祉士会）

大会校教員「情報発信と実践研究の可能性」について発題

15:30-18:00　自由研究発表①／課題セッション①

18:30-20:00　情報交換会

・2 日目（2023 年 7 月 9 日（日））

9:30-12:00　第 40 回大会記念企画「座談会：学会創立 50 周年を展望する」

12:00-13:00　昼休憩／学会総会

13:00-15:30　自由研究発表②／課題セッション

15:30-16:00　クロージング

＊参加申し込みは、日本ソーシャルワーク学会ホームページよりお願いします。

https://www.jsssw.org/about-annual-meeting/post-1481.html

Ⅵ. 新入会員の声

入会にあたって

大阪大学大学院（博士後期課程）　**木原　琴**

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会致しました木原琴と申します。現在は、スクールソーシャルワーカーとして勤務しながら、大阪大学（人間科学研究科）にて博士後期課程に所属し研究に励んでいます。研究は、児童養護施設における性（生）の言説をテーマに進めています。現在は 2018 年よりボランティアとして関わっていたバングラデシュの NGO が運営する児童養護施設をフィールドとして実践・研究をしています。ソーシャルワークに関わる分野に幅広く興味関心がありますが、児童福祉や国際福祉に特に関心があります。

この学会を通して、ソーシャルワークの多様性をさらに知り、研究、実践ともに学びを深めることができればと願っております。積極的に学会活動に参加し、諸先生方のご指導を賜りながら、努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ソーシャルワークとしての研究

岡山県立大学　**竹本　与志人**

このたび、入会させていただきました竹本といいます。大学卒業後、20年間医療機関のソーシャルワーカーとして在宅医療、緩和医療、救急医療、精神科医療など様々な診療科の患者や家族の援助を行ってまいりました。岡山県立大学では主にソーシャルワークに関する授業を担当しています。

私の専門は医療福祉・精神保健福祉であり、これまで「血液透析患者の心理的変容過程と家族心理に関する研究」や「認知症のある人への経済支援に関する研究」、「認知症が疑われる人への受診・受療援助に関する研究」などを行ってきました。現在は認知症関連の研究を継続しつつ、医療ソーシャルワーカーを対象としたスーパービジョンにおけるパラレル・プロセスの実証研究を行っています。これからも社会問題に敏感になり、クライエントの立場から苦悩を可視化するなど、アドボカシーに重点を置いた研究を行っていきたいと考えています。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

入会にあたって

彩社会福祉士事務所　**坂本　彩**

滋賀県大津市在住の坂本彩と言います。大学を卒業してから28年間、主に障害分野で知的障害のある方の支援の仕事をしてきました。入所施設、放課後支援、相談支援の実践現場で働いてきましたが、最近は障害種別問わず地域全体をフィールドに様々なかかわりが広がってきています。今は主に3つの仕事をしています。①独立型社会福祉士事務所、②大津市障害者自立支援協議会の事務局、③龍谷大学の非常勤講師、です。いつも、当事者とともに活動することを大切にしていて、研修の講師なども当事者の方と一緒にすることも多いです。

今、関心のあるテーマは、障害福祉の実践現場で働く女性ソーシャルワーカーのジレンマについてです。職場全体で言えば女性の方が多い職場でも、管理職は男性になることが多い傾向があり、非常勤は女性が多いです。その背景にある構造的な問題について考えたいと思っています。

入会にあたってのご挨拶

青森県立保健大学 健康科学部　**小山　宰**

私は医療機関でのソーシャルワークに12年ほど従事した後、現在は大学でソーシャルワークに関する研究・教育に携わっています。実践現場では、認知症のある独居高齢者やがんの終末期で霊的な痛みを抱える人など専門職による支援のみでは十分な対応がしきれない人々に数多く出会いました。そうしたなかで多様な課題を抱える人々に対して、ソーシャルワーカーを含む専門職と市民がいかに協力をして支援を具体化できるのかに関心を持つに至りました。

現在は、専門職と市民が公共サービスの内容に関する協議および意思決定、さらには当該サービスの提供を共に行う取り組みを意味するコ・プロダクションに関する研究に取り組んでいます。実践現場と研究との繋がりを意識しながら、現場の実践に少しでも寄与できるような研究に取り組んでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

日本でソーシャルワークを研究し、アジアのソーシャルワークに貢献したい

東京工業大学環境・社会理工学院社会・人間科学系　**章琦（ZHANG QI; ショウキ）**

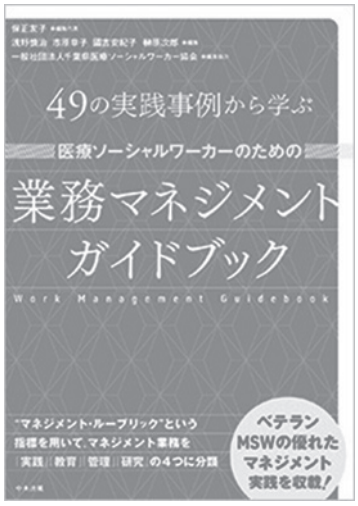
中国の復旦大学でソーシャルワーク専攻を７年勉強して、去年４月に東京工業大学の博士課程に進学した章琦（ショウキ）と申します。学部論文をきっかけに、マクロソーシャルワークに興味を持ち始め、ソーシャルワーカーの政策への動きかけに関する研究を実行するために、来日しました。今はソーシャルワーカーの政策実践（Policy practice）について研究しています。

東アジアの中で、日本はソーシャルワークの長い歴史を持ち、あらゆるレベルの社会福祉の実践において貴重な経験を積み重ねてきました。これらの経験を研究することは、アジア地域のソーシャルワーク共同体に貢献できます。日本で最も重要なソーシャルワーク研究組織である日本ソーシャルワーク学会は、私は中国でも聞いたことがあります。本学会で研究に携わり、学術的な交流を重ねることは、私がソーシャルワーク研究者として成長し続けるために間違いなく役立つと思います。今後は、学会が主催するさまざまな活動に積極的に参加し、学会の発展に貢献したいと思います。

Ⅶ. 自著紹介

日本福祉大学　**保正　友子**

保正友子編集代表・浅野慎治・市原章子・國吉安紀子・榊原次郎編・一般社団法人千葉県医療ソーシャルワーカー協会編集協力（2023）『49の実践事例から学ぶ　医療ソーシャルワーカーのための業務マネジメントガイドブック』中央法規



2023年４月に、医療ソーシャルワーカー（MSW）と一緒に本書を出版しましたので、ご紹介させていただきます。

現在、多くの中堅・ベテランMSWが業務マネジメントで悩んでいます。私はMSWの業務マネジメントとは「スムーズで効果的な相談援助業務を実施するため、多様な資源を活用し、そこで働くメンバーにとっての場をつくり育てていき、メンバーが生き生きと動いていけるような営み」（p.5）と定義しました。従来の「管理運営」の考え方よりも、さらに躍動的で可変的なニュアンスで捉えた方が現実に即していると考えたため、伊丹敬之1）やミンツバーグ2）の定義を参考にしています。

実は多くのベテランMSWは、すでに各所で優れた業務マネジメント実践を展開しています。しかしながら、それらの取り組みが個々バラバラで組織内に埋もれており、まとまった形で世に出ていません。そこで、一書に編纂して世に出すことで、多くの中堅期以降の方々の参考にしていただきたいというのが、出版の動機になりました。

本書は、私がコンサルタントとして関わって作成した、千葉県MSW協会のマネジメント・ルーブリック3）の枠組みを活用し、実践・教育・管理・研究の４項目に沿って、30人のベテランMSWにより49のマネジメント事例を紹介しました。49事例を分析してみると、ベテランMSWのトップマネージャーは３つの動きをしていました。①「仕組みづくり」「新たなチャレンジ」「組織文化の醸成」がキーワードのトップマネージャーとして躍動すること、②「言語化」「可視化」「ネットワーク化」がキーワードのトップマネージャーとして基盤を耕すこと、③「理想のMSW像を持つ」「MSWの醍醐味を示す」「学び続ける」がキー

ワードのトップマネージャーとして自分を磨くことです。どなたの事例からも、生き生きとした息遣いが伝わってきました。

全国的に活躍している執筆者の事例ばかりですが、その取り組みを参考にしていただくことは可能です。本書がMSWに留まらず、ソーシャルワーカーの業務マネジメントの充実に資すれば幸いです。

＜引用文献＞

1）伊丹敬之（2013）『場の理論とマネジメント』東洋経済新報社

2）ミンツバーグ，池村千秋訳（2011）『マネジャーの実態「管理職」はなぜ仕事に追われているのか』日経BP社

3）千葉県医療ソーシャルワーカー協会ホームページ

http://www.chiba-swhs.jp/category/%e3%83%ab%e3%83%bc%e3%83%96%e3%83%aa%e3%83%83%e3%82%af/

編集後記

日本ソーシャルワーク学会通信（ニュースレター）第136号をお届けします。

この4月から、本学でも全面的に対面授業が再開され、学生たちで賑わうキャンパスがようやく戻ってきた感じで、嬉しく思っています。コロナ禍の3年間は、人と人が会う、集う、話すというこれまで当たり前にやっていたことが、決して当たり前ではなかったということを経験した時期だったと思います。この3年間の経験を今後に活かしていかないといけないと思っています。

オンラインは確かに便利ですので、今後の本学会の活動にも色々と活用して行ければ良いと思います。そして一方では、（もちろん感染予防には留意しながらも）会員の皆様で集まれる機会を、ぜひ取り戻して行きたいと思っています。7月の第40回大会は、東北福祉大学を会場に対面とオンラインとのハイブリッドで開催されます。ぜひご参加下さい。多くの皆様と仙台でお目にかかれることを楽しみにしています。

暑い日が続きます。皆様どうかご自愛下さい。

同志社大学　空閑　浩人

（学会副会長／総務委員会）

【日本ソーシャルワーク学会事務局】

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4－1－1　オザワビル2F（株）　ワールドプランニング内

TEL：03-5206-7431　　FAX：03-5206-7757

E-mail：jsssw@zfhv.ftbb.net　　http://www.jsssw.org